平城宮東院地区の調査（平城第595次）

平城宮は約１km 四方の東側に東西約250m、南北約750m の張り出し部をもち、その南半の南北約350m の範囲を東院地区とよんでいます。『続日本紀』等の文献により、東院地区には皇太子の居所である東宮や天皇の宮殿がおかれたことが知られています。また、神護景雲元年（767）に完成した「東院玉殿」や、宝亀４年（773）に完成した光仁天皇の「楊梅宮」は、この地にあったと考えられています。

東院地区では、これまで南半や西辺を中心に発掘調査を進めており、2004 年度以降、西北部の発掘調査を継続して実施しています。2017年には大規模な井戸やそれにともなう溝を検出し、東院北部の空間利用を考える上で、重要な知見を得ました。

今回の調査では、この大型の井戸周辺の空間利用と施設の様相の解明を目的として、その東方に調査区を設定しました。調査面積は東西27m、南北42mの1,134㎡で、2018年１月22日に開始し、７月13日に調査を終了しました。

今回の調査では井戸にともなう階段や建物、被熱痕跡、土坑等を検出し、大きく２つの成果をあげることができました。

ひとつめは、今回調査区の大部分で３回分の奈良時代の整地を確認したことです。東院造営当初の整地のほか、奈良時代後半・末期の整地とみられる炭を含む土が調査区の北半を中心に広範囲に積まれていました。これまでにも東院造営当初の整地を部分的に確認していましたが、奈良時代後半以降の改作にともなう整地の確認は初めてです。これにより改作の際の大規模な土木工事があきらかになりました。

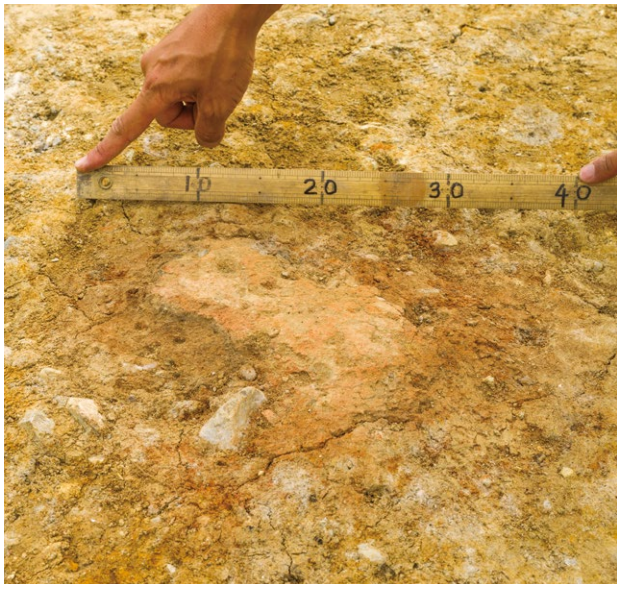
ふたつめは、大型の井戸の周辺の空間利用があきらかになったことです。第593次調査では、井戸の西方で２本の溝を建物内に引き込んで、井戸からの水を利用した様子や、溝の廃絶時には貯蔵具・調理具等の多くの土器とともに埋め戻されたことを確認しました。これに加えて、今回、井戸の東方では、井戸と一段高い場所にある建物をつなぐ石積みの階段や、調理にともなうとみられる被熱痕跡等を検出しました。

一段高くなっている井戸の東方では出土する土器も食器類が多く、火を用いて調理する厨のための空間が大規模に展開していることがわかりました。井戸の東方と西方では段差をつけて空間の利用方法が異なっていたことがうかがえます。

被熱痕跡は奈良時代の火を用いた調理の実態を示す重要な遺構と考えられます。また大規模な厨のなかでも調理や配膳等の機能に応じて、空間を分けて利用していたとみられます。文献史料から奈良時代後半の東院地区では天皇や五位以上の貴族らが饗宴をひらいたことが知られており、宮殿の華やかな表舞台を支える一端をあきらかにする重要な手がかりとなります。

去る６月17日には現地説明会を開催しました。梅雨の最中で天気が心配されましたが、幸い晴天に恵まれ、813名の方にお越しいただきました。東院地区の調査はこれからも続きますので、今後の調査にご期待ください。　（都城発掘調査部　海野 聡）

調査区全景（南東から）



井戸の東方で検出した被熱痕跡